

派遣国	アメリカ	派遣都市	テキサス州 ウェイコー
出国年月日	2020年2月2日	帰国年月日	2020年3月1日
法政大学との共催団体名（受入団体名）	ベイラー大学		
主な活動内容	日本語教育		

（1）課題設定 【出発前】

私がこのプログラムに参加する目的は、外国語教育へのアプローチ法を学ぶとともに、自身が日本語のネイティブスピーカーとして、できることを現地の学生に還元することだ。国によって外国語教育のシステムは異なっており、理論を学ぶだけでなく、実際に教育現場に行ってみないとわからないこともある。ベイラー大学では、数ある外国語の中から日本語を外国語科目として履修することができる。英語やフランス語などの世界共通語でもなければ、日本でしか主に使われていない言語を学ぶのは、日本人の私からすれば不思議なことである。外国語教育に興味がある私は、ベイラー大学の日本語クラスでは、どのような教育法で4技能をどのように扱っているのかなどのアプローチ方法を観察しつつ、自信が学んできたことを試行錯誤しながら試してみたいと考えている。また、私自身幼い頃から外国語を勉強してきているため、言語は異なっても、同じ学習者という立場だからこそ理解できる難しさを、自身の経験を活かしながら学生に寄り添いつつ学習の手助けをしたい。

達成目標は、主に3つある。1つ目は、フィールドワークで30人にインタビューをすることだ。1ヶ月間しかない滞在期間で、タイムスケジュールは未定であるが、できる限り時間を見つけて多くの人の話を聞きだしたい。2つ目は、休日などを使ってウェイコーの特色について学ぶことだ。事前調査だけでは知ることができない、現地に住んでいる人々にしか分からないことを直接聞いたり足を運んだりして、実際に見聞きたい。3つ目は、学生からの質問に確実に答えることだ。ネイティブスピーカーだからこそ答えづらい質問もあるはずなので、そういった質問も調べることや先生に相談することを通して、時間がなかったとしても必ず正確な情報で答えたい。

（2）事前調査活動内容 【出発前】

テキサス州ウェイコーは、テキサス州の中部に位置しており、寒暖差が激しい気候であると言われていいる。ベイラー大学が主要な教育機関である。ベイラー大学は、テキサス州ウェイコーに位置し、広大な敷地面積を誇っている。大学周辺にも広い土地が広がっている。そのため、近くのショッピングモールへ行くのにも車やバスが必要不可欠だ。文系学部の中に日本語コースがあり、11ある第二言語の選択肢のうちの1つである。

このプログラムの業務としては、週に一回の日本文化紹介プレゼンテーション、日本語コースの授業の助手、「お茶の時間」の主催、日本語スピーチコンテストのボランティア、現地の学生との協同フィールドワークがある。日本文化紹介プレゼンテーションは、各回5分間英語で行う。ただ日本文化を羅列するだけでなく、現地の学生の興味や授業内容に合わせたプレゼンテーションが求められる。「お茶の時間」とは、日本語コースの学生やベイラー大学に通う日本人留学生が、週に一度一時間ほど集まり、日本文化を楽しみながら学ぶワークショップのようなものである。日本語スピーチコンテストのボランティアは、ダラスへ行きコンテストの運営を補助するだけでなく、事前にコンテストに参加する学生とアポイントメントを取り、発音やイントネーションのアドバイスをする。協同フィールドワークは、事前に考えたテー

マを法政の教授にご指導いただきながら研究計画を日本で練り、渡米後に現地の教授や学生にアドバイスをもらいながらインタビューを通してテーマを研究し、発表するものだ。

参考文献：バイラー大学公式ホームページ、国際インターンシップ募集要項、裏引き継ぎ書、昨年度渡航された先輩からのお話。

(3) 現地における活動内容 【活動中】

出発～到着

成田空港からダラス国際空港までは約 12 時間弱だった。入国審査や手続きを行い、約 8 時間空港で乗り継ぎ便を待った。ダラス国際空港では長旅と時差ボケが相まってほぼ無気力状態だったため、何もできなかった。ウェイコーに到着後、プレフューメ先生と合流し、様々な大手スーパーマーケットやご飯に連れて行っていただいた。

授業アシスタント

バイラー大学の日本語教師はプレフューメ先生、藤井先生、熊畑先生の 3 人であった。授業は、プレフューメ先生の 1・2・3 年、藤井先生の 1・2 年及び映画の授業、熊畑先生の 3 年の授業に参加させていただいた。学生によって学習開始の時期やレベルが様々であるため、各クラスに 1~4 年生の学生がいた。主な業務としては、50 分間の授業の中で前に出て発話の見本をすること、グループワークを進めること、学生からの質問に答えること、日本についてのディスカッションに参加し意見を述べること、スピーキングテストの審査をすることを主に行った。また、授業外の時間に課題を手伝うことも多々あった。学生と連絡先を交換し、学生からお願いされることがほとんどであったが、こちらから不安な学生に声をかけ勉強を見たりもした。



日本についてのプレゼンテーション

基本的には先生方から授業に沿った内容のプレゼンテーションをするように指示を受け、スライドを作成し授業内で 5 分ほどの発表をした。私たちが行ったプレゼンテーションのテーマは、食堂の使い方、電車の乗り方、温泉の入り方、家のルール、飯テロ、日本の俳優、てまり寿司の作り方(授業内で調理実習を行った)、箸の使い方、就職活動、出身地の紹介などであった。基本は日本語と英語どちらも書かれたスライドを用いて簡単な日本語で発表したが、1 年生のクラスでは英語で発表する機会もあった。



お茶の時間

毎週火曜日に1時間行われるお茶の時間では、第1週目は自己紹介プレゼンテーションを含めた親睦会、第2週目以降からはインターンで企画運営をした。ひな祭りの紹介、折り紙、かるた遊び、おにぎりパーティー、外遊びを組み合わせで行った。仕切ることには大変であったが、できる限り簡単な日本語で進めるように努めた。



ダラス日本語スピーチコンテストボランティア

スピーチコンテストは第2週目の土曜日だったが、金曜日の夕方ごろに出発し、ホテルに泊まった。ベイヤラー大学の日本人留学生2人とボランティアをした。当日は、8時ごろに会場入りし、説明を受けた。事前に送られてきた担当表をもとに、午前に予選、午後に本選を行った。私は主に会場準備、受付、賞状書き、表彰式を手伝った。担当表にないことをかなり多く頼まれたため、臨機応変な対応と素早く動ける力がかなり求められた。



フィールドワーク

プレフューメ先生と調査方法を相談し、Google Form を用いて 41 人の学生にアンケートに回答していただき、そのうちの 4 人と日本語クラスの先生方 3 人に個別インタビューを行った。結果を分析・考察し、最終週のプレゼンテーションで発表した。



その他

授業外でも、学生と交流する機会が多くあった。まず、JSA という、日本語クラスの学生だけでなく日本に興味を持っている学生が集まったサークルのような団体がある。活動は隔週で行われており、計 2 回参加した。そこで多くの学生に出会うことができた。また、寮のキッチンでオムライスを学生と作るイベントにも参加した。大学内のイベントに参加する機会も多く、学生に沢山の場所に連れて行ってもらった。

出発～帰国

帰りの便が朝の 5 時に出発だったため、前日の夜からプレフューメ先生のご自宅にお世話になり、送っていただいた。ダラス国際空港で 5 時間ほど乗り継ぎ便を待ち、午後 3 時半頃に成田空港に到着した。

(4) 振り返りおよび事後研究 【帰国後】

授業観察を通して、バイラー大学日本語クラスでは、スピーキングに力を入れており、さらに主に日本語を用いて指導していることが分かった。学習のゴールは試験ではなく、将来日本で使えるような知識を得られるような授業展開だった。学生それぞれの学習方法や興味を尊重し、教材を用意していた。

フィールドワークでは目標人数の 30 人を超えて意見を聞くことができた。また、休日に学生にウェイコーの中でも格差がひどい地域に連れて行ってもらい、市との対立の話を知ることができた。大学で完結してしまう生活だったため、このような機会がなければウェイコーについて深く知ることはなかっただろう。学生の質問に対しては、どれほど自分が普段意識せずに、日本で暮らし日本で生活しているかを痛感した。日本人によってもスタイルが異なるため、正確な情報のために、様々な日本人に聞いたうえで全て共有するようにした。

このプログラムを通して、自身の研究テーマの甘さも痛感した。より対象を絞り、今回の生活で学んだことを生かして今後の過ごし方を見つめなおしたいと思う。